

# インタビューを活用したコミュニケーション能力育成のための 授業実践研究

## —高等学校普通科の国語科授業で展開するキャリア教育—

木村 誠二

千葉大学大学院教育学研究科修士課程

本研究では、民間企業で働く社会人への取材をもとに、実社会でのコミュニケーションとは何かについて模索し、さらに現代の若者がどのような点において実社会でのコミュニケーションについての課題を抱えているかをあきらかにしていった。そのうえで高等学校国語科の授業における、実社会でのコミュニケーション能力の育成に関わる実践について確認すると多いとは言えず、国語科のシラバスにおいて言語活動に関する記述がない高等学校があることもわかった。こうした現状から、キャリア教育の視点から実社会でのコミュニケーション能力を育成するために、言語活動の運用を意識した新たな国語科授業を開発することが必要だと考えた。授業は民間企業で働く社会人をゲストティーチャーに招き、インタビュー活動を取り入れて展開した。開発した授業により、社会人とのコミュニケーションをインタビュー形式で実践することの有効性が確認出来た<sup>1</sup>。

キーワード：キャリア教育、コミュニケーション、インタビュー、国語科、言語活動

### 1. 問題の所在

#### 1.1. キャリアを形成していくうえで必要とされる コミュニケーション能力

キャリア教育の観点から、コミュニケーション能力に関する話題が取りあげられることがある。就職活動や職場での課題解決等、働く場面におけるコミュニケーション能力は、重要な観点の一つであると言えるだろう。現代の人々の働き方は多様であると考えられる。職場における、職種の違いや専門性の高低、年齢や世代の違い、雇用形態や労働時間の違い、国籍の違い、また、働くことへの価値観の違い等、働く場がこれまで出会ったことのない立場の人々とのコミュニケーションの場になる可能性があると言えるだろう。

日本経済団体連合会は、企業の大卒等新卒者の採用選考活動を総括することを目的に、1997年度より現在まで調査（調査対象：経団連企業会員 1,339社）を実施している。「2017年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」<sup>2</sup>での、「選考にあたって特に重視した点」によると、図1にあるように「コミュニケーション能力」が2004年から2018年までの15年もの間、連続で1位であることがわかる。景気の後退や回復、世界情勢の変化やグローバル化の動き等、様々な時代の変化があつた中でも「コミュニケーション能力」は多くの企業から選考

の際の重要な点としてあげられている。

コミュニケーション能力は社会に必要な要素として、時代を問わず重要性が指摘される能力のひとつであると捉えることが可能である。

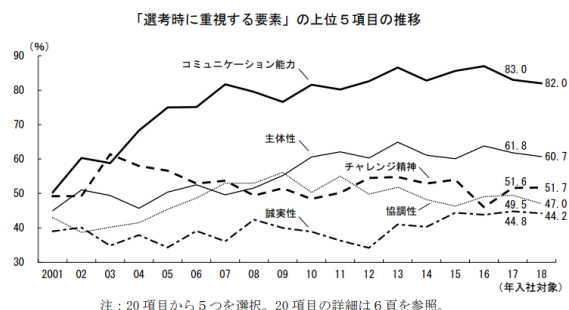


図1 「選考時に重視する要素」の上位5項目の推移<sup>3</sup>

#### 1.2. 本研究でのコミュニケーション能力について

##### 1.2.1. 企業で働く社会人への取材を通して

コミュニケーション能力という言葉は多くの場で用いられるものの、内容を具体的に指し示す定義が曖昧なまま使われることがある。では、企業で働く社会人が実社会の中で必要と感じているコミュニケーション能力とは何なのだろうか。

本研究では、授業を開発するにあたりキャリア教育の観点に即した「実社会でのコミュニケーション能力」という言葉に定義を与える必要がある。そこで、民間企業で働く社会人8名に取材を行った。

Seiji KIMURA : Practical study on Classes to Promote Communication Skills with Interviews ·Developing High School Level Japanese Lessons for Career Education  
Faculty of Education, Chiba University

## 【取材について】

取材対象全員が、民間企業の人材育成部門や研修での講師、採用面接を担当している（いた）方である。取材は、2018年9月21日～23日（α大学の構内）、10月10日（β株式会社・会議室）の2回にわたり、アンケートと口頭で行った。

## 【質問】

日本経済団体連合会が実施している調査において、「選考にあたって特に重視した点」としての「コミュニケーション能力」が15年間1位です。

みなさんが、実社会の中でのコミュニケーション能力を定義づけるならば、具体的にどのようなものだと考えますか。

以下が8名の回答である。

- a氏：相手が何を求めているかを引き出す力。聴く能力。
- b氏：相手の質問の意図を汲み取る力。自分の考えを表現できること。
- c氏：相手の話を理解する力。相手に自分が思っていることを伝える力。
- d氏：相手の意図を汲み取る力。自分の考えを整理して、相手に伝える力。
- e氏：人を気遣いながら、自身の意見を発言する力。
- f氏：相手のことを理解できる能力。自分の伝えたいことを整理して、正確に伝えられる能力。
- g氏：相手の意図を理解して、話し合うことができる能力。
- h氏：相手を理解して、自分も相手に理解してもらうこと。また、自分の考えを伝え、相手に丁寧に説明することができる能力。相手の考えを正確に汲み取ることができる能力。巻き込む力。

取材をふまえて、国語科の「言語事項」の「話すこと・聞くこと」に着目して考察を行った。「話すこと」という行為をより深化させ、相手がわかるようにアウトプットするという意味を含んだ「伝える」という言葉を、8人中4人が用いていることがわかる。近い表現と考えられる「自分の考えを表現できること」や「自身の意見を発言する力」、「話し合うことができる能力」を含めると、8人中7人が、相手に伝えることの重要性を含む内容を回答している。また、「聞くこと」についても、聞くことをより相手の気持ちを推し量る領域にまで表現したと考えられる「汲み取る力」という言葉を、8人中3人が使っている。「聴く能力」、「相手の話を理解する力」、「相手が何を求めているかを引き出す力」、「相手のことを理解できる能力」、「相手の意図を理解して、話し合うことができる能力」といった、相手の考えを推し量ることに近い意味と捉えられる回答を含めれば、8

人中8人が「聞くこと」の重要性を回答している。そして、回答者が意図するところを、回答文章全体から分析するならば、f氏の回答にある「相手のことを理解できる能力。自分の伝えたいことを整理して、正確に伝えられる能力」のように、「話すこと」と「聞くこと」の両方をバランスよく活用しながらやりとりすることで、コミュニケーションをとる者同士がお互いに納得出来るところまで到達していこうという回答が8人中8人に見受けられることがわかる。

さらに音声言語以外にも、d氏の「相手の意図を汲み取る力。自分の考えを整理して、相手に伝える力。」のように「書くこと」や「読むこと」についても気にかけていると捉えることが可能な回答が、8人中5人から見つけることが出来る。

以上の回答をもとに、キャリア教育の授業を開発する文脈に沿ってコミュニケーション能力を定義付けるならば、「相手に自分の意志を適確に伝達し、また、相手の意図を丁寧に汲み取り、主張の差異を調整して一定の合意を得ること」とまとめることが出来ると考えられる。本研究ではこの定義を基盤にして進めていくこととする。

## 1.2.2. 若者のコミュニケーション能力に関する課題

では、1.2.1.で定義づけた実社会でのコミュニケーション能力を授業によって高めていくにはどのような実践が効果的なのであろうか。企業で働く社会人が考える、若者に関する実社会でのコミュニケーション能力の課題についての回答を参考に考察したい。

## 【質問】

若者の実社会でのコミュニケーション能力には課題があると言われることがあります。どのような点が課題だと感じますか。

- a氏：きちんと言葉で自分の述べたいことを表現する力。
- b氏：人を大切に作る言動をできるかどうか。
- c氏：相手を理解できないことがあると感じる。社会に出る前に、多くの価値観に接する機会が少ないゆえの経験不足からくる課題かと思われる。どの程度多くの人と接してきたかは重要ではないだろうか。
- d氏：「できません」のように、ひとことで会話を終わりにしてしまう。
- e氏：突っ込みを入れて、深く相手の考えを聞き出そうとする力がない。
- f氏：相手の質問の意図を汲み取ることが苦手だと感じる。間合いの取り方にも課題を感じる。また、自分の考えを相手に向かって表現できない。特に初対面であったり、年齢が離れていたりすると顕著だと感じる。

g氏: 伝えることが苦手だと感じる。たとえば、わからないことがあった際に、訊くことができないなど。

h氏: 自分と身近な存在や親しい友人との人間関係構築には長けているが、広範囲な分野の様々な年齢層の人々とのコミュニケーション能力は劣っていると感じることもある。

企業で働く社会人の回答からわかるのは、まず、若者自身と年齢に隔たりがあることや初対面である等、仲間内ではないと考える他者とのコミュニケーションにおいて課題があるとする意見が見受けられるということである。c氏による「社会に出る前に、多くの価値観に接する機会が少ないゆえの経験不足からくる課題かと思われる。どの程度多くの人と接してきたかは重要ではないだろうか。」といった回答や、f氏が述べる「自分の考えを相手に向かって表現できない。特に初対面であったり、年齢が離れていたりすると顕著だと感じる。」、h氏の「自分と身近な存在や親しい友人との人間関係構築には長けているが、広範囲な分野の様々な年齢層の人々とのコミュニケーション能力は劣っていると感じることもある。」のように、8人中3名が若者にとって仲間内ではないとされる立場や年齢の異なる他者や、自身とのつながりや関係が深いと言えない他者とのコミュニケーションに関する課題をあげている。

また、相手とのやりとりを通して新しい考えを聞こうという点にも、8人中3人に課題があると感じていることがわかる。e氏の「突っ込みを入れて、深く相手の考えを聞き出そうとする力がない」や、f氏の「相手の質問の意図を汲み取ることが苦手だと感じる。」、g氏の「わからないことがあった際に、訊くことができない。」は、より深い領域まで相手の考えを聞き出そうとする姿勢や、積極的に質問しようという姿勢が欠けていることを指摘したものだと考えられる。

さらには、表現の方法や表現の内容に課題があることへも8人中3人の指摘が見られた。a氏による「きちんと言葉で自分の述べたいことを表現する力。」や、b氏の「人を大切にできる言動をできるかどうか。」、d氏の「『できません』のように、一言で会話を終わりにしてしまう。」といった回答は、他者と接する中で、表現方法や表現内容に課題を見出していると捉えることが可能だろう。自らの考えや意図が正確に盛り込まれるように表現することや、丁寧にコミュニケーションを図ろうとする姿勢が欠如している場合があることへの指摘と捉えられる。

こうした意見を参考にしながら、実社会でのコミュニケーション能力を高めていく授業を開発するならば、社会とのつながりが明確に意識出来る実践に取り組むことが大切だろう。

### 1.3. 高等学校・国語科での言語活動を活用したキャリア教育の意義

1.2.2.での、企業で働く社会人が指摘する、若者が抱える実社会の中で活用するコミュニケーションについての課題を確認すると、次のような内容に集約出来る。

- ・年齢に隔たりがあることや初対面である等、若者にとって仲間内ではないと考える他者とのコミュニケーションにおいて課題があること。
- ・より深い領域まで相手の考えを聞き出そうとする姿勢や、積極的に質問しようという姿勢が欠けていること。
- ・自らの考えや意図が正確に盛り込まれるように表現することや、丁寧にコミュニケーションを図ろうとする姿勢が欠如していること。

こうした、実社会での課題が浮き彫りになることで、生徒が学校生活という日常の中でのコミュニケーションと、実社会でのコミュニケーションとは、人との関わり方ややりとりの在り方そのものが異なっていることが確認出来る。毎日の学校生活の中でコミュニケーションをとる場合、やりとりをする相手はクラスの友人や部活動の仲間、または年齢が2歳程度異なる先輩や後輩と言われる存在であり、大人とのコミュニケーションにおいてもクラス担任や部活動の顧問が多くを占めていると予想される。

堤・橋爪<sup>4)</sup>は、『社会性』というのは、『互いによく知らない人びと(市民)が集まっても、きちんと社会を運営していける能力』のことである。これは『共同性』、すなわち、『よく知っている仲間となら、うまく集団をやっている能力』とは、別のものである。と指摘し、親しい顔見知りの中で身につける「共同性」だけではなく、「社会性」を身につけていくことの重要性を述べている。

堤・橋爪の言うように「共同性」だけではなく「社会性」にまで広がりを持たせたコミュニケーションを身につけるために、国語科において授業を展開するのであれば、実社会との繋がりを体験しながら学ぶことは重要なことだと考えられる。それは、限られた仲間や身近な教員とのコミュニケーションだけでなく、実社会の中での見知らぬ他者との円滑なコミュニケーションを学ぶということである。その際、特に必要になるのがキャリア教育の観点ではないだろうか。先にも述べたように、生徒にとって、今後のキャリア形成の中でコミュニケーション能力は育むべき重要な点であると考えられる。国語科の言語活動がより社会の実情に即した体験になるためには、生徒のキャリア形成を視野に入れ、学外の社会人からコミュニケーションについて学ぶことこそ、学習の機会として必要なのではないだろうか。

#### 1.4. 高等学校・国語科における授業の現状と先行研究の検討

では、国語科において、言語活動の分野を活用しキャリア教育の観点からコミュニケーション能力の育成を行った授業にはどのようなものがあるのだろうか。高等学校・国語科における授業の現状をふまえたうえで、先行研究について検討したい。

これまで、コミュニケーション能力については各方面から研究がすすめられ、いくつもの検討がされてきた。だが、国語科として言語活動を活用したコミュニケーション能力育成の研究は多いとは言えず、特に実社会との関わりを意識した取り組みは僅かである。中でも、高等学校・国語科を題材にした研究は特に少ない。

では、なぜ高等学校の国語科授業は、コミュニケーション能力の育成や実社会との関わりを意識したものが少ないのであろうか。

まず、インターネット上で一般公開されている神奈川県私立日本大学藤沢高等学校<sup>5</sup>、埼玉県立大宮高等学校<sup>6</sup>、東京都立深川高等学校<sup>7</sup>、1年生対象の「国語総合」のシラバスを例に考察したい。例としてあげた高等学校は、学校の教育方針や在学する生徒の志向や進路等、各々が異なった特性を有していると考えられる。夏季勉強合宿、国際交流、大学等へのキャンパスツアーといった活動については計画的に実施しており、生徒や保護者の要請に応えようと努力していると捉える事が可能な高等学校である。だが、シラバス上の内容を確認すると、言語活動を意識した内容を取り入れている記述は僅かである。日本大学藤沢高等学校での学習の目標において「伝え合う力」、評価内容において「筋道を立てて話したり的確に聞き取ったりしているか。」という記述があり、深川高等学校での評価の観点・方法において「目的や場に応じて効果的に話したり的確に聞き取ったりして、自分の考えを深め、発展させている。」という記述があるのみで、実践される単元や学習項目、学習内容を示す項目においては記述が見当たらない。また、「言語活動」という言葉以外にも、「スピーチ」、「発表」、「討論」、「話し合い(話し合い、話しあい、話し合、はなしあい)」といった表現についても見つけることはできない。さらに、3校とも国語科の授業として言語活動に焦点を当てた科目である「国語表現」を設置していない学校でもある。このように、教科学習や進路活動、その他の学校行事を積極的に運用している学校であっても、国語科の年間予定を明示したシラバスの中に「言語活動」を意識した内容は少なく、実社会でのコミュニケーションを育成することを視野に入れた授業は実践されていないという現状がある。例示した各高等学校のシラバスによれば、授業の殆どは、現代文の内容読解、古典の内容読解や文法事項の習得に時間を割いていることが確認出来る。

こうした現状からわかることは、高等学校・国語科の授業では、現代文では読解、古典では読解と文法事項の説明や確認に時間を割いており、体験的な言語活動にはほとんど目が向けられていない可能性があるということである。

岡山県総合教育センター「高等学校教員の授業力の力量形成に関する研究」<sup>8</sup>では、「これまで、高等学校国語教員の中で、『教材をどう教えるか』という発想の下で授業づくりがなされていた現実も少なからず存在する。言語活動にふさわしい教材という発想で、教科書だけにとどまらない教材を開発するためには、緻密かつ幅広い教材研究が必要になる。こうしたことを踏まえて、これからの国語授業を構想できる力が、特に今後重要となっていくと思われる。」と現状が指摘され、高校教員が教科書以外にも目を向け、言語活動にふさわしい教材を開発することを提案している。

こうした状況から推察出来るのは、大学受験対策等としての時間を授業の中で割かざるを得ない時間的制約があることや、教員が今でも読解型授業を中心にしており、新たな授業の在り方を模索しきれていない状況があること、さらには教科書だけにとどまらない教材の開発が十分には進んでいないことがあげられるのではないだろうか。

だが、言語活動を活用し実社会でのコミュニケーションについて学ぶことは、国語科の授業において取り入れる必要がある重要な取り組みであると言える。1.1.であげた、日本経済団体連合会が企業に行ったアンケート調査において、大卒等新卒者の採用選考活動での「選考にあたって特に重視した点」が、15年間連続「コミュニケーション能力」が1位になることからわかるように、実社会でのコミュニケーションについて生徒が学ぶことは、今や自らのキャリアを形成していくうえで欠かせないものとなっているのである。その中であって、言語活動の基幹的役割を担っている国語科が授業において実践を取り入れていくことこそ、社会の要請に応えていると言えるのではないだろうか。

「コミュニケーション教育推進会議」<sup>9</sup>は、「コミュニケーション能力が求められる背景」をまとめている。以下に、コミュニケーション能力の育成が社会の要請であることを示す部分を抜粋して紹介したい。

社会の変化と子どもたちに求められる能力

○ 21世紀は、「知識基盤社会」の時代であるとともに、グローバル化が一層進む時代である。それは、多様な価値観が存在する中で、自分とは異なる文化や歴史に立脚する人々とともに、それぞれ異なる意見や考え、アイデアなどを交換し、正解のない課題、経験したことのない課題を解決していかなければならない「多文化共生」

の時代でもある。

○ 経済協力開発機構(OECD)では、子どもたちに必要な能力の一つとして「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」を挙げ、また、企業が学生を採用するに当たっては、コミュニケーション能力を最も重視するなど、コミュニケーションに関する能力の育成を求める社会的要請が高まっている。

このように、今後、これまでの経験だけでは対応できない社会の変化が訪れることが予想される。実社会の中における他者との円滑なコミュニケーションをとれることが、生きていくうえで欠かせない重要な能力になる可能性があると言えるだろう。

では、高等学校の国語科授業がこのような現状にある中、キャリア教育を視野に入れた国語科の言語活動を活用した授業は、どのように展開されているのであろうか。先行研究を確認し、検討したい。

礼埜<sup>10)</sup>は、長きにわたり高等学校における国語科の言語活動を活用し、授業でインタビュー実習を行ってきた。キャリア教育という観点を明示はしていないが、生徒がインタビューを行う約束を取りつけるところから始まり、学外の社会人と接触していく点や、インタビューの対象が「学校文化に支配されていない職業人であることが条件」としている点は、キャリア教育の側面を持った取り組みだということが出来るのではないだろうか。礼埜は、実践の目的を3点示し、「1つ目はインタビューと聞き書きのスキルを身に付けること、2つ目は学校の文化とは異なる社会から学び、視野を広めること、3つ目は交渉する力をつけること」としている。授業は1年間を通して行われる。大まかな流れを紹介したい。

1学期には実践内容を紹介しながら、インタビューの対象や質問してみたい内容等をまとめる。過去の実践を教材にしながらインタビューの内容を具体的に学んでいく。また、インタビュー後にインタビューの対象者から聞いた内容を、一人称で自らの語りとして書くという作業があることも告知していく。2学期には、生徒同士が3人一組になり、実際のインタビューに向けた実習を行う。実習では、インタビューする人、インタビューされる人、観察者を全員体験し、それぞれの立場において気付いたことをまとめていくという作業を行う。3学期は、インタビューを行った内容を、一人称で語った作品を紹介し、外部講師と共に優秀作品を選出する。

礼埜の実践は年間を通じたインタビューに関連する学習活動から、国語の「話すこと、聞くこと」「書くこと」「読むこと」全ての領域を網羅した優れたものだと言えるだろう。だが、礼埜自身はいくつかの課題をあげている。この課題を検討してみたい。

2012年に行われた礼埜の実践では、最終的な課題の

提出者が全体の約半数に終わったことをあげている。実践の対象となった生徒が何名であるかは記されておらず、正確な状況を把握することはできないが、インタビュー練習を200名収容出来る多目的室で行っていることから、大人数を対象とした授業であることがうかがえる。また、礼埜は「これまでは講座の人数が30人以下でかつ3単位であった場合は全員が提出した。また約40人で2単位であったクラスの場合でもほぼ全員提出していた。」と述べている。ここから、礼埜の実践は、個別に指導が可能な範囲で特に有効だということが予想出来る。また、「この実践は個人によって進捗状況に大きな差が出やすい。その差が最も出るのが、アポイントメントを取る段階である。」とある。学外の社会人にインタビューの実践を行うには、授業の進行過程の節目に教員が留意しながら外部の社会人との交渉方法や交渉状況を確認しておくことが重要であることがわかる。

礼埜の先行研究から、「インタビュー」が有効なコミュニケーション能力育成の方法になることが確認出来た。インタビューという言語活動は、直接的で、相手や環境などの状況次第で話し方や話す内容が変化しやすく、さらにはその場にあった聞き方や、メモのとり方、次の質問への準備、相手と対面するうえでのマナーが必要であることなど、重要な点を数多く取り入れることが可能である。キャリア教育の視点に立った言語活動として活用することで、実社会でのコミュニケーション能力を育成するための有効な手段となる可能性があるのではないだろうか。

#### 1.5. 先行研究をふまえた本研究の意義

礼埜は、高等学校・国語科の授業において言語活動としてのインタビューを取り入れ、生徒に学外の社会人と接する機会を提供している。これは、キャリア教育を視野に入れた国語科の授業として有効な取り組みであると考えられる。授業でインタビューを活用することは、外部の社会人と向き合う機会が提供しやすいという点と、その際に、生徒にインタビューという明確な役割を与えることが出来るという点があるからである。

ゲストティーチャーとして本研究での授業を筆者とともに担当した、企業で働く社会人である片岡氏も、取材においてインタビュー形式で授業を展開することの有効性を述べている。片岡氏は、キャリアの視点を含んだ本実践と、実社会の中でのコミュニケーションをテーマにした研修との共通点を指摘する。企業での研修においても、新入社員に対しインタビューという役割を与え、その役割を全うすることでコミュニケーションの幅を広げていく試みを有効だと考え、実践しているという。自分に与えられた立場を明確に理解し他者とコミュニケーションを図ることは、当事者が相手とやりとりをす

る際、自らの役割をより自覚しやすく、コミュニケーションが取りやすくなると言えるのではないだろうか。これは、コミュニケーション能力の育成を図るという目的を達成するうえで重要なことであると言えることが出来るだろう。

また、国語科の言語活動として学ぶうえでも、インタビューは有効であると言える。後述する今回の授業実践では、「インタビューを行う際に気をつけること」を生徒に説明する時間を設けている。片岡氏を含む企業で働く社会人への取材をもとに、筆者と片岡氏で内容をまとめたものである。そこで、授業実践において取り扱う予定の「インタビューを行う際に気をつけること」として生徒に伝える内容が、国語科の言語活動とどの程度対応するかを表 1.に示した。ポイントとして説明する内容と言語活動との繋がりを確認することが出来る。

表 1 授業実践(2 時間目)において生徒に紹介する「インタビューを行う際に気をつけること」

項目番号	項目	該当する言語活動
1.	インタビューで知りたいことを明確にする（事前準備を含む）	書くこと・読むこと
2.	聞くべきことの洗い出し（事前準備を含む）	聞くこと・書くこと・読むこと
3.	礼儀正しく、言葉遣いは丁寧に	話すこと・聞くこと
4.	しっかりと聞く（聴く）	聞くこと
5.	メモをとる	書くこと・読むこと
6.	話し手が言おうとすることを正確に聴き、気持ちに伝える	聞くこと
7.	結論を急がない	話すこと・聞くこと
8.	「学ぶ姿勢」で聴く（「無知の姿勢」で聴く）	聞くこと
9.	正しく理解しているかどうかを確認する	話すこと・聞くこと・書くこと
10.	話し手の全体に気を配る	聞くこと

以上のように、インタビュー活動を授業において活用することは、実社会におけるコミュニケーションのどのような点において留意すべきなのか考える機会を生徒に提供出来る点や、自らが任された役割を明確に意識しながら取り組むことが出来るという点において、有効性があると考えられる。また、実社会の中においても有効とされ、実践されている活動を高等学校・国語科において展開することは、現実に即した社会の中におけるコミュニケーションを学ぶという本研究の目的にも合致するところである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、「キャリア教育の視点から実社会でのコミュニケーション能力を育成するために、言語活動の運用を意識した新たな高等学校・国語科授業を開発すること」である。

そのための手段としてインタビュー活動を活用し、実社会との結びつきを強く意識しながら言語活動の領域を活用した授業を展開することで、高等学校・国語科授業の新たな視点として提案したい。その後、開発した授業の実践、考察から有効性と課題をあきらかにしていく。

## 3. 研究の方法

企業において人材育成関連の部門で長らく新入社員採用面接や人材育成、研修開発等に携わってきた学外の企業で働く社会人への取材を参考にしながら、国語科におけるコミュニケーション能力育成の授業を行う。ここでは、インタビューを企画していく実践や、インタビューの実践者と観察者に分け、社会人に「インタビューリレー」と題した実践を行う。その際、社会の中で必要とされる対話能力や、フォーマルな関係でのやりとり、初めて顔を合わせる人物とのコミュニケーションについての重要な点（話し方、質問のポイント、話を聞くときの態度など）について学ぶことが出来るようにする。

## 4. 授業の開発

### 4.1. 授業の概要

〈実施校〉	千葉県 私立 A 高等学校
〈実施対象〉	高等学校普通科 1 年生 1 学級 (23 名 女子 13 名、男子 10 名)
〈実施方法〉	グループワークで授業を展開する。 6 グループ(1 グループ:3 名~4 名)
〈実施場所〉	多目的室
〈実施日〉	2018 年 11 月 7 日、8 日
	※授業は 2 時間連続 : 1, 2 時間目、3, 4 時間目、計 4 時間展開
〈授業者〉	木村誠二、片岡靖高 (ゲストティーチャー)
〈協力〉	社会人 3 名 (片岡氏を含む)

### 4.2. 授業の実践

#### 4.2.1. 1 時間目の実践内容

1 時間目 2 時間連続授業 (1/4)

〈本時のテーマ〉

「インタビュー計画を立てることで、実社会でのコミュニケーションについて学ぼう！」

〈活動内容〉

・実社会の中では、限られた人間関係の中でのやりとりにとどまらない、様々な人々とのコミュニケーションが必要になる。特に職業人として人とコミュニケーション

をとるということは、単なる個人的な会話という範囲に収まらない多様なやりとりが必要になる。本時では、コミュニケーションの中でも、様々な言語活動の要素が必要なインタビュー活動を取りあげる。1時間目の活動として、まずインタビューを行うために必要な準備や計画について具体的に生徒に考えさせる。その際、実社会(企業)での出来事を想定したストーリー(図2参照)から学んでいく。

- ・授業は、本研究の目的であるコミュニケーション能力(「相手に自分の意志を適確に伝達し、また、相手の意図を丁寧に汲み取り、主張の差異を調整して一定の合意を得ること」)を高めていくという目的に繋がるよう十分配慮する。
- ・ゲストティーチャーとして授業を担当してもらう企業で働く社会人の片岡氏とは、その他の社会人に取材した内容を確認し、取材をもとにまとめた実社会でのコミュニケーション能力の詳細を共有する。

「お菓子会社版」  
お菓子の製造販売する会社Jは、昨年に比べ売り上げが減少してしまった。その打開策として新商品(お菓子)を開発しようと計画している。そこで、売上増に繋がるヒントをくれそうな人物にインタビューを実施することで、どんな新商品を開発するかの手掛かりを探りたい。君なら、誰に、どんな質問をする?

図2 実社会(企業)での出来事を想定したストーリー(例)

#### 4.2.2. 2時間目の実践内容

2時間目 2時間連続授業 (2/4)

〈本時のテーマ〉

「インタビュー計画を発表しよう！」

〈活動内容〉

・授業を振り返り、グループごとにまとめたインタビュー計画について代表者が発表する。その後、ゲストティーチャーから講評をもらい、さらにインタビューを行う際に重要なポイント(「インタビューのポイント」)を話してもらおう。最後に、3時間目に行うインタビューの実践に備え、筆者が本研究のために企業で働く社会人へ取材を行った内容を紹介する。紹介は国語科の言語活動における3領域を援用しながら展開し、国語科の授業としての振り返りにもなるようにする。

#### 4.2.3. 3時間目の実践内容

3時間目 2時間連続授業 (3/4)

〈授業の概要〉

「社会人にインタビューを行い、多様なコミュニケーションを学ぼう！」

〈活動内容〉

・「インタビューリレー(プロフィールに書かれていな

い意外な一面を探ろう!)」を行う。

【インタビューリレーについて】

(ア) インタビューを受けるゲストティーチャー(社会人)3名を招待する。社会人には、これまでの学んだことを生かしての実践となることを伝える。

(イ) 形式は、インタビュアーとなる生徒が、インタビューを受けるゲストティーチャーを囲み質問していく。生徒には事前に簡単なプロフィールを配布しておく。観察者となる生徒はインタビュアーとなる生徒を主に観察し、気付いたことをメモにとる。

(ウ) インタビューの目的は、ゲストティーチャーのプロフィールをもとにインタビューし、「プロフィールに書かれていない意外な一面を探る」ことである。

(エ) 以下が、実践において資料として活用するプロフィールの一例である。質問は、プロフィールに書かれている順に、時間を区切ってインタビューしていく。インタビューが単なる一問一答の質問にならないように促す。また、直前のインタビュアーの話した内容と、その回答に良く耳を傾け、知りたい内容を引き出すことに集中する。

(オ) インタビューは質問内容を時間で区切り(各5分)、グループ内でインタビューが途切れないように繋いでいく。初めにインタビュー順を決め、原則としてその順番は守る。ただ、どうしても次のインタビュー内容が思い浮かばない場合は周囲が助けてもよい。また、メモをとりながら話を聞き、インタビューの目的である「プロフィールに書かれていない意外な一面を探る」ことが出来るように協力して実践する。

(カ) インタビューは、6グループ全てが行う。観察する側は、インタビューを行ううえで重要だと感じたこと、これまでの自らのコミュニケーションを振りかえって気付いたことをメモする。

(キ) 終了後、「プロフィールに書かれていない意外な一面を」グループごとに話し合い、発表に備える。また、実社会(特に職業人として)の中でコミュニケーションをとるうえで注意すべき点や今後身につけなければならないと感じたことをグループごとにまとめ、発表する。

(ク) ゲストティーチャーから全体の講評をもらう。

#### 4.2.4. 4時間目の実践内容

4時間目 2時間連続授業 (4/4)

〈授業の概要〉

実社会でのコミュニケーションについて考えてみよう

〈活動内容〉

インタビューリレーを終え、今回のインタビューの目的とした「プロフィールに書かれていない意外な一面」を見つけることが出来たかを確認する。出来たのであればどのようなことかを、グループごとに模造紙にまとめ発



表する。また、実社会の中でコミュニケーションをとる際に必要なことや、今後身につけておくことが大切だと感じたことについても、同様に模造紙にまとめグループごとに発表する。その後、筆者(授業者)が、企業で働く社会人からの取材内容を紹介し、グループワークで話し合った内容と比較することで更なる振り返りとする。

## 5. 考察

### 5.1. 授業実践の有効性と課題

#### 5.1.1. 生徒の活動状況から

まず、1、2 時間目において実践した、インタビューの計画を立てる取り組みで行ったグループワークについて分析したい。実践は事前にこちらが用意した「活動の具体例」を参考にしながら話し合いを行った。当初、戸惑い気味で話し合いを進めていたものの、まとめ方として例示した、「(1)誰に?」、「(2)なぜ、その人を選んだのか?」、「(3)どんな質問をしますか?」、「(4)質問でどのようなことを聞き出したかったのですか?」といった問いに対し、こちらが僅かなヒントを提供することで少しずつ議論は深まっていった。

今回のインタビュー計画は、企業が売り上げを伸ばすためにはどうすればいいのかについて、インタビューを活用し打開策を探していくものであった。本来であれば、企業の経営方針や、各業界の現状等を知ったうえで売り上げ増を目指すためのヒアリング調査として考える話題であるのかもしれない。だが、国語科の授業として、実社会でのコミュニケーションを学ぶことが目標であることを生徒に意識させる取り組みを行うことで、別の側面が浮き彫りになったのではないと言えるだろう。相手に対する聞き方や質問内容、聞く相手の選択などが話題にのぼることで、計画的に人と対話することの意義を重視した話し合い、発表に繋がったのではないだろうか。生徒の様子から、本実践で取り組んだインタビューを計画する授業は、高校生が実社会でのコミュニケーションと向き合ううえでの有効な事例になりうる可能性があると言えるだろう。

次に、「社会人にインタビューを行い、多様なコミュニケーションを学ぼう!」についての分析を行いたい。本時では、インタビューリレーと名付けた取り組みを実践した。インタビューを受ける側の人物として学外の社会人を招き、生徒が3~4名で順にインタビューを続けるものである。インタビューは「Ⅰ.これまでの仕事、仕事の心構え/やりがい」「Ⅱ.高校・大学時代」「Ⅲ.好きなこと、資格等」と質問項目を時間で区切り実践した。実践における生徒の目標は、決められた時間の中でインタビューを行いプロフィールにない意外な一面を探すことである。前のインタビュアーが話した内容を引き受

け、話題を広げていくことを心がけなければならないというルールがある。つまり、一問一答式の質問になってはならないということである。実践が始まり、生徒は当初戸惑いながらインタビューを始めたが、インタビューを受ける側のゲストティーチャーの支援があり、生徒は次々とインタビューを繋げていくことに成功した。途中、数グループにおいて滞ってしまう場面もあったが、生徒同士が協力して状況を乗り越えていた。

インタビューリレー(図3参照)では、生徒が初対面の社会人とやりとりをすることで、生徒自身が実社会においてコミュニケーションをとるうえで大切なことは何かを考える機会になり、経験的な学習活動が展開出来たとと言えるだろう。活動としては目的を概ね達成することが出来た。特に、リレー形式で会話が進められるため生徒に一定の緊張感が保たれることと、初対面の社会人にインタビュアーという役割を担って向き合うことで、集団の中で一つの役割を果たすという達成感を得ることができ、有意義な取り組みになったと言えるだろう。即興性が高いやりとりは、言葉が途切れてしまう等の(生徒にとって)少々の失敗と考えられる偶発性を含んでおり、コミュニケーションについて実践的に学ぶ適切な機会になったと言える。後述する、片岡氏の言う、コミュニケーションにおいて失敗した場合「自分なりにうまく修正し、立て直す力」が身につくきっかけを得る実践でもあったと言えるだろう。



図3 インタビューリレーの様子

#### 5.1.2. 実践後のゲストティーチャーへの取材から

実践直後に、今回の授業を担当していただいたゲストティーチャーである片岡氏に取材を行った。その中で、片岡氏から教科でキャリア教育の実践を行うことについて「(キャリア教育を)今回のような『言語活動・表現の実践』のような時間の中に取り入れることで、(生徒にとって)授業の内容が実社会と結び付くことを知る貴重な機会になった」との評価を受けた。

片岡氏とは、授業を展開するにあたって、新学習指導



要領の中で共通必修科目となった「現代の国語」が目指していると考えられる方向性を共有した。「高等学校学習指導要領解説・国語編」<sup>11)</sup>における「国語科改訂の趣旨及び要点」によると、「現代の国語」は、「実社会・実生活に生きて働く国語の能力を育成する科目」として位置付けられている。本研究では、「国語総合」現代文分野が実践科目であるが、引き継がれることになる「現代の国語」の趣旨や要点をふまえた実践として展開したことは、新たな国語科授業の視点を示すことが出来た可能性があると言えるのではないかと。

また、片岡氏とは、実践前の打ち合わせにおいて国語科の3領域について理解してもらい、援用することを共有することが出来た。今回の実践のまとめにおいて、片岡氏が国語科の言語活動と実社会のコミュニケーションを関連付けてより丁寧に説明したことは、打ち合わせが有効に働いたことによるものだと考えよう。国語科の授業での展開であるということやゲストティーチャー側がより意識したことにより、実践の目的に沿った展開が出来たと考える。

さらに、片岡氏はもう一点、コミュニケーション能力の育成に関する視点から本研究が有効性の高い取り組みであることを述べる。それは、企業において新卒者の採用面接業務に携わる中で経験したことが背景にあるという。片岡氏によれば、新卒者の若者が面接等のコミュニケーション能力が問われる場面で、言葉につまったり、質問に適切に応えられなかったりした場合、その失敗をうまく立て直すことができない場面に遭遇することがあると言う。こうした状況をふまえて片岡氏は、「社会に出る前に失敗しておくことの重要性」を指摘する。

片岡氏は、他者とのコミュニケーションをとる中で、やりとりの一部を修正し、自身の考えを伝えるために対話の在り様を立て直すことが重要であるという。こうした実社会の中でのコミュニケーション能力を育成していくヒントは、社会人をゲストティーチャーに招いて実践を行ったからこそ、得ることが出来た成果だと言えるのではないだろうか。

### 5.1.3. 事前、事後アンケートをもとに

本実践では、授業実践当日、授業直前に事前アンケート、直後に事後アンケートを行った。アンケートは無記名式で、アンケート対象生徒が23名と少人数であるため、回答には選択式だけでなく記述式も取り入れた。

アンケート全体の結果としては、本実践が生徒にとって概ね有意義なものであったと捉えることが出来る。

特に Q8 から Q13 までの、生徒が実社会でのコミュニケーション能力の育成を目的とした授業を直接的に評価する選択式6項目において、本実践への有効性の高い評価が見られたことは重要な点だと考えられる。

さらに、記述部分では、事後アンケートにおいて実践前と比較し、新たな視点で書かれたものが増加し、回答がより具体的になった。実社会でのコミュニケーションを国語科の授業において学ぶことが出来るという視点に立って回答していることは、本実践の評価出来る点と言えるだろう。

表2 授業実践事前事後アンケート結果

質問	a. そう思う	b. ややそう思う	c. あまりそう思わない	d. そう思わない
Q1 国語の授業は好きですか?	12	9	2	0
Q2 Q1で「あまりそう思わない」「そう思わない」と答えた人に質問します。なぜですか?	・文章を読み取るのが好きではないから。 ・ねむくなるから。			
Q1.1 今日の授業は楽しかったですか?	20	3	0	0
Q1.2 理解できましたか?	13	6	1	0
Q2.1 そう答えた理由を教えてください。	【そう思う、ややそう思う】 ・みんなの意見を聞いて、話し合いが出来たから。・グループでコミュニケーションについて話し合えたから。・様々な意見を聞いて率直に面白かったから。・自分たちで、相手から情報をひきだすためにどうすればいいかを考えながらインタビューができたから。・とても役立つことができたから。・沢山お話しできた。・聞けたから。・なかなかやらないことをやったから。・いろいろなことがわかったから。・グループの人と協力できたから。・社会人へのインタビューが新鮮で楽しかった。・色々経験してきた社会人ならではの話を聞けたから。・新しい考えを得た。・今まで考えることが無かったと考へられたから。・インタビューを通して、コミュニケーションの取り方だけではなく、その人の価値観も知れていい機会になった。・色々な人とコミュニケーションが取れて面白かった。・自分も知らないことがあった。・社会人にインタビューする機会はないかな。・コミュニケーションの重要性を知ることができた。・実社会の人と実際に会話をするとコミュニケーション相手に、自分がしっかり聞いていることが同時に意識を伝えることが大事だとわかったから。・グループ内でコミュニケーションをとるのが楽しかったから。			
Q2.2 II そう答えた理由を教えてください。	【そう思う、ややそう思う】 ・先生たちの話がわかりやすかったから。・実社会でのコミュニケーションについて少し掘った気がしたから。・関心を持ちながら聞くことができたから。・インタビューの実践や最後のまとめを聞いて、コミュニケーションが実社会でどんなものなのかわかった。・先生方の説明がわかりやすかったから。・自分が思っているとは違う新しい視点が増えたと思うから。・コミュニケーションが大事だとわかったから。・先生から様々なことを聞けたから。・コミュニケーションについてよくわかったから。・興味を持って取り組めたからだと思います。・とてもわかりやすく説明や体験を通していただけました。・コミュニケーションがいかに大切かわかったから。・この授業を通して、目的等が自分なりに発見できた。・したいコミュニケーションについてインタビューを通して学べたから。・版で意見をまとめることができたから。			
Q3. 国語の勉強は好きですか?	9	10	4	0
Q4. Q3で「あまりそう思わない」「そう思わない」と答えた人に質問します。なぜですか? (記述式)	【あまりそう思わない】 どこかで必ず生れが生じると思うから。			
Q4. Q3で「あまりそう思わない」「そう思わない」と答えた人に質問します。なぜですか? (記述式)	【よくわからないから。】 ・作品を読んでいるばかりで興味がないから。・音字だから。理解できない文章が多いから。			
Q5. 国語の授業で学びたいことは何ですか? 具体的にどんなことを習得したいですか? (記述式)	【よくわからないから。】 ・読みとる力。・得るための力。・文章力を身につけたい。・人の話や文章を理解する力を磨きたい。・有名な文学作品を読みたい。・コミュニケーションやその考え。・社会で生きていく。・他の人の考えや行動の受け止め方を、話を聞いて自分の考えをまとめて聞きたい。・読解力。・社会に出て役立つ力。・受験に役に立つ力。・読解力や人の表現力。・伝える方法。スピーチなど。(3名)・年上の人とのコミュニケーション方法。・物語の面白さや世界観。・社会に出てから必要な知識。・筆者の考え。			
Q6. コミュニケーションについて学ぶことは大切だと思いますか?	19	4	0	0
Q7. Q6でそのように回答した理由を教えてください。	【事前】 ・人とかかわるなかでも大切だからです。・社会に出たら大切だから。・将来他者の人が必要になるから。・コミュニケーションは生活していく上で、無いと出来ないと思ったから。・人は話すことで繋がると思っているから。・コミュニケーションは社会に出てからも大切なことだから。・自立した時に自分の周りにいる人のイメージは強くてコミュニケーションが出来ると思うから。・社会に出て大切だし、仲間でも大切だから。・人を学ぶものだから。・得た知識は必要だから。・今、社会で必要とされているから。・自分自身も発信するには必要不可欠だから。・他人の意見を正しく読み取るのに必要だから。・人と関わる時とても重要だから。			
Q8. インタビューを実践することで、コミュニケーションについて学ぶことができると思いますか?	14	9	0	0
Q9. 今日の授業は今後の生活に役立ちますか?	17	6	0	0
Q10. 人の話を聞いたり、話したりすることが好きですか?	13	5	5	0
Q11 国語の授業でコミュニケーションやインタビュー等の活動はしたいですか?	10	7	6	0
Q12 実社会に出る前にコミュニケーションについて学ぶことは必要だと思いますか?	14	6	3	0
Q13 社会人にインタビューを行うことはコミュニケーションを学ぶために役立ちましたか? (事後) 役立つと思いますか?	21	2	0	0
Q14 実社会の中で必要なコミュニケーションとは何だと思いますか?	21	2	0	0
Q15 社会人にインタビューを行うことはコミュニケーションを学ぶために役立ちましたか? (事後) 役立つと思いますか?	16	5	2	0
Q16 実社会と、高校でのコミュニケーションの違いは何だと思いますか?	21	2	0	0

## 5.2. 授業実践における課題

まず、本実践における課題として、活動の展開時間が短いことがあげられる。今回の取り組みでは、2時間連続の授業を2回展開した。前半の「インタビューを計画してみよう！」では、生徒とゲストティーチャーとのアイスブレイクの時間が自己紹介のみであり、授業が円滑に進行する前の数分間、全体の流れが遅れてしまうことがあった。また、話し合いが活発に行われるまでに時間がかかることがあった。ゲストティーチャーの適切な支援で乗り越えることが出来たものの、グループワークへの導入にも配慮が必要であったろう。さらに、後半の「インタビューリレーの実践」では、各グループのインタビュー時間を15分間設けていたが、生徒が予想以上に積極的なインタビューを行い、また、ゲストティーチャーによる熱心な回答もあり、生徒から「もう少し続けたかった」という声が聞かれた。展開時間を余裕のある設定にしていなかったという点は、課題と言わなければならないだろう。生徒の日頃の状況を確認しながら、特性に応じた時間配分を考えるべきであった。

加えて、授業内容自体にも検討の余地があると考えられる。今回、前半の授業において展開した活動は、「実社会での出来事を想定したストーリー」をもとに、インタビュー対象を選定し、インタビューを計画するという活動であった。実際にインタビューの実践は行わず、グループごとに検討したインタビュー計画を発表するという内容にとどまっている。だが、インタビューを通して実社会のコミュニケーションについて学ぶのであれば、計画にとどまることなく、実践することが本来は望ましいと言えるだろう。後半の「インタビューリレー」についてもゲストティーチャーを招いたインタビューの内容に課題が残ると考える。本実践では「社会人の人物像を探り、さらに意外な一面を見つけよう！」というテーマで行った。だが、実社会のコミュニケーションについて知り、社会人からコミュニケーションスキルを学ぶのであれば、実社会の中でも特に「はたらくこと」に関連する質問を深化させていく設定でインタビューリレーを行う方が、有効性がさらに高まったとも考えられる。改善すべき課題であろう。

## 5.3. 今後の展望

授業は、時間設定やインタビュー内容等の課題を残しながらも、生徒の活動状況、生徒への事前事後のアンケート、授業実践後のゲストティーチャーへ取材から判断するならば概ね有効なものであったと言えるだろう。

現在、高等学校におけるキャリア教育を意識した教科の授業実践はそう多くは展開されていないのが現状である。今回の取り組みが新しい視点の提案となり、今後の高等学校における教科を活用したキャリア教育の実

践に繋がることが望ましいと言えよう。また、今回の実践は有効であったものの、僅か4時間の授業展開であった。生徒がコミュニケーション能力を高めていくための活動としては十分とは言えないだろう。キャリア教育を意識しながらコミュニケーション能力を育成するには、今後、様々な授業において意識され、実践に結びつくことで定着という意味での成果に繋がっていくのだろう。

<sup>1</sup> 本論文は筆者の平成30年度千葉大学大学院教育学研究科教科教育科学専攻修士論文「インタビューを活用したコミュニケーション能力育成のための授業実践研究—高等学校普通科の国語科授業で展開するキャリア教育—」を再構成したものである。

<sup>2</sup> 日本経済団体連合会(2017)「2017年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」, pp.1-2,  
<https://www.keidanren.or.jp/policy/2017/096.pdf> 2018年12月25日アクセス

<sup>3</sup> 日本経済団体連合会(2017), p.2

<sup>4</sup> 堤清二・橋爪大三郎編(1999)『選択・責任・連帯の教育改革【完全版】』勁草書房, pp.16-17

<sup>5</sup> 日本大学藤沢高等学校(2018)「普通科、国語総合シラバス」  
[https://www.fujisawa.hs.nihon-u.ac.jp/wp/wp-content/themes/twentyten/images/learning/syllabus2018/high/grade01/japanese/grade-h01\\_japanese01-09.pdf](https://www.fujisawa.hs.nihon-u.ac.jp/wp/wp-content/themes/twentyten/images/learning/syllabus2018/high/grade01/japanese/grade-h01_japanese01-09.pdf) 2019年1月4日アクセス

<sup>6</sup> 埼玉県立大宮高等学校(2018)「普通科、理数科、国語総合シラバス」

[http://www.ohmiya-h.spec.ed.jp/?action=common\\_download\\_main&upload\\_id=17533](http://www.ohmiya-h.spec.ed.jp/?action=common_download_main&upload_id=17533) 2019年1月4日アクセス

<sup>7</sup> 東京都立深川高等学校(2018)「普通科、国語総合シラバス」, p.1,

<http://www.fukagawa-h.metro.tokyo.jp/site/zen/content/000121721.pdf> 2018年1月4日アクセス

<sup>8</sup> 岡山県総合教育センター・平賀和治、宗好慶太郎、田中誠一郎(2011)「高等学校教員の授業力の力量形成に関する研究」『研究紀要』第5号, p.6,

<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/chousa/kiyou/h23/11-02.pdf> 2019年1月4日アクセス

<sup>9</sup> 文部科学省・コミュニケーション教育推進会議(2011)「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～『話し合う・創る・表現する』ワークショップへの取組～」, p.1,

[https://www.geidankyo.or.jp/12kaden/sites/default/files/pdf\\_com20110829.pdf](https://www.geidankyo.or.jp/12kaden/sites/default/files/pdf_com20110829.pdf) 2019年1月4日アクセス

<sup>10</sup> 札植和男(2015)「国語科教育におけるインタビュー実習に基づく聞き書き授業の研究」『京都教育大学国文学会誌』第40号, pp.27-45

<sup>11</sup> 文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領解説 国語編」p.9,  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407073\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407073_02.pdf) 2018年12月19日アクセス

## 謝辞

本研究での授業実践にあたり、日本IBM株式会社の片岡靖高氏をはじめ、多くの民間企業の方々にご協力をいただいた。心より感謝の意を表したい。